

# 蒙古襲来(元寇)

13世紀後半、日本では鎌倉時代の中頃、宋をはじめとした東アジアの王朝を制圧した元のフビライハーンが、朝鮮半島の高麗をも征服し、さらに南下して日本にも侵略の手を延ばそうとしていました。これが後の「元寇」です。

「蒙古襲来絵詞」の主人公・竹崎季長と武房が会おう！

元は、日本との通商を目的に1268年から度々使者を送りましたが、その内容が威圧的だったため鎌倉幕府はこれを無視。激怒したフビライハーンは、高麗との連合軍を九州北部に派遣し、1274年の「文永の役」と1281年の「弘安の役」の2度にわたって日本への侵攻を試みますが、いずれも失敗に終わりました。この元による派兵は、日本が初めて侵略の危機にさらされた戦いでした。

日本勢。その中で気を吐き、同じ肥後から参戦していた託磨頼秀の手勢と共に、わずか230騎で敵陣に突撃したのが武房です。

この時、多くの犠牲を出しながらも武功を立て、戦場から引き上げてきた武房と出会った人物こそ、元寇を描いた歴史絵巻物「蒙古襲来絵詞(もうこしゅうらいえことば)」の主人公、肥後の御家人・竹崎季長(たけさきすえなが)です。

敵の首を部下に掲げさせて敵陣から戻った武房に対し、季長が「爽やかに見えますぞ(涼しくこそ見え候え)」と声を掛けたことが、絵巻物の中に描かれています。「鬼のよう」と恐れられた蒙古兵すら圧倒したその姿は、季長の目にまぶしく映ったのでしょうか。



菊池神社に展示されている元軍の甲冑(菊池神社所蔵)



「蒙古襲来絵詞」は作者不明の全2巻の絵巻物で、竹崎季長が元寇における自身の戦いぶりを描かせたものとされています。その中には、元軍が使用した「てつほう」(陶器製の容器に鉄片を詰め、火薬で打ち出す武器)などが描かれており、貴重な歴史資料となっています。



元軍の博多上陸の様子を描いた矢田一嘯作『博多上陸<後>』/うきは市本佛寺所蔵

## 文永の役(1274年) 海上に吹いた“神風”が元軍を撃退

5度にわたる通商の要求を鎌倉幕府に無視され続け、業を煮やした元は、吉岐・対馬を経由して10月19日に900隻・2万8千人の大軍で博多湾沖に押し寄せ、20日に上陸。戦いは元軍の一方的な勝利でした。しかし、翌日の戦いに備え海上の船に戻ったところを折からの台風が襲い、壊滅的な打撃を受けた元軍は引き上げていったとされています。

# 押し寄せる元(蒙古)の大軍 武房、2度の元寇で勇猛果敢に戦う

## 生いきの松原防塁(福岡市) 美しい海岸線に築かれた鉄壁の防塁

文永の役の後、鎌倉幕府は元軍の再来襲に備え、博多湾の海岸線に沿って石積み防塁を築きました。そのうち長垂海岸から小戸海岸にかけての約2.5kmの間に肥後の御家人らが築いたものは生の松原防塁と呼ばれ、一部が当時の高さで復元されて見学できるようになっています。



防塁の上を固める文永の役の英雄・武房(中央の赤い扇子を持った人物)と再会した季長(馬上の人物)が、武士の誉れとされる「先駆け」の証人になってもらえるよう依頼する場面(蒙古襲来絵詞)

## 弘安の役(1281年) 14万の大軍を再び台風が襲う

前回の雪辱を果たすため、フビライハーンは約14万人の大軍を派遣。鎌倉幕府も文永の役の後、博多湾の防御を強化するため、九州の御家人たちに防塁を築かせるなど、万全の準備をして迎え撃ちました。両軍の攻防は6月上旬から7月下旬まで及びましたが、7月30日夜半、4千隻ともいわれる元の船団を再び台風が襲い、日本勢の強固な抵抗もあり、元軍は退却を余儀なくされました。

## 2度の元寇で活躍を見せるも報われず

9代 隆泰の子で10代当主となった武房。文永の役、弘安の役という二度の元寇での大きな活躍で「九州に菊池あり」を見せつけ、九州武士の憧憬を集めたものの、その後の幕府からの恩賞は甲冑一式とわずかな領土のみという悲運に泣きます。この出来事を境に、菊池一族は幕府への反感を強めていきました。

Kikuchi Takefusa



10代 菊池武房

九州武士が憧れた  
数々の武勇も  
鎌倉幕府の  
冷遇に泣く...

元との一度目の戦い・文永の役に参戦した武房らの菊池勢は130騎余り。これに対して、竹崎季長の手勢はわずか5騎でした。数も多く、その上豪華な甲冑に身を包んだ菊池一族と、その先頭に立ち元軍と戦い武勲を上げた同じ肥後の武房の姿は、どれほど輝いて見えたことでしょうか。「紫のさかおもだかの鎧」な

ど、武房の装いまでつぶさに描写されていることにも、その様子が表れています。ところが、武房の功績に対する恩賞はわずかなものでした。その理由としては、武房が「霜月騒動」という幕府の政変で敗北した安達泰盛と親しかったからという説があります。